



+6,000mm トーキョー

東京工業大学 平松ありさ

2xxx年、海水面は21世紀初頭から6m上昇した。東京にはいまだ1000万人が住み、海上都市としての進化を続けている。陸地は後退し、洪積台地の等高線が浮かび上がる。かつての河川や幹線道路は船の航路となり、交通、物流は船で行われる。C型になったかつての環状線は、掛けた部分を補うように船が走る。その陸上交通と水上交通の乗り換え場所となる上野駅を設計する。後退した陸地のふちに建ち、陸地と水上都市の境界をつなぐ上野駅は、人や乗り物の転換地になりエネルギーや水、ゴミの変換点となる。



際に立つ

東京藝術大学 佐藤美羽

神楽坂を中心に多くの街が隣り合うエリアにおいて、「街の領域」を散策者の視点で意識する。神楽坂の領域は拡散する方向性をもつ。実際、神楽坂という名称を使う建物は空間的な領域を越え、隣街まで広く及んでいる。ただ、その拡がりや、街並みが同化していくことも意味している。隣街との切れ目が不明瞭な5つの場所に小さな建物をおくと、それらがもつファサードは街の領域を再構成する。無個性になりつつある都市に対し、街ごとの個性を強め、風景を切り替える起点として、「神楽坂の領域の際に立つ建築」の提案である。



淡墨色の都市遺跡

東京大学 風祭覚

高架に首都高、地上に国道、地下に鉄道が通る池尻大橋駅は、積層する大きい交通が都市を分断している。インフラの老朽化、交通量の減少、自動運転の普及が予想される50年後の在り方を提案する。本提案は、橋脚と地下鉄隧道からなるコンクリート一体構造物を開削によって露わにし、従来大きい交通の隙間を縫って利用されてきた小さい交通と人のための空間に読み替え、既存駅と接続させるものである。発掘された「都市遺跡」と補修のために設計した構築物は、都市公園的な空間として現れ、新たな人の流れを生み出す。



具体的市場

東京工業大学 池田瑤葵

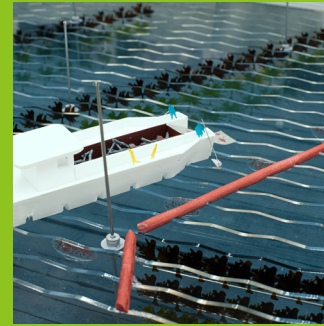
郊外消費地は、眠りにつき、受動的な消費をこなすだけの色褪せた場所のように感じる。そこで、帰属感が希薄な土地と住まう人々を結びつけるものとして、可視化されたインフラである“食のインフラ=卸売市場”に着目した。巨大さゆえにブラックボックス化された卸売市場を分場、公営団地への挿入を行う。トラスの大屋根と機能に合わせた大きさ、形状の壁柱からなる空間で、人々はモノの流れと日々の変化を知覚する。小さくなった市場は、立体的で可変的な境界である壁柱を手掛かりに、知覚可能な単位へとさらに分解されていく。



Pochant

東京藝術大学 馬場悠輔

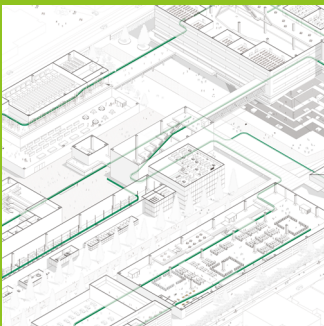
大量生産されてきた無個性な箱型空間は、あらゆる物事を受け入れる一方、もちこまれた機能に縛られて、固定されていく。予定調和の空間で、私たちは同じようなことを繰り返す。退屈ではない。この固定された関係に波風を立てる存在としてpochéを設計し、対象(箱型空間)にもちこむ。pochéの配置に応じて、空間の構成要素である「人」「家具」「poché」「建物」はそれぞれ役割やふるまいを変え、その四つ巴の関係は流動的なものになる。pochéを動かし、その場限りの空間を獲得する行為をPochantと名づける。



海庭

- 海洋流出ゴミ回収インフラの提案、その風景 -
東京大学 青木絵利香

日本では年間約4万tのプラスチックと160tのマイクロプラスチックが街から川へ、川から海へと捨てられている。問題なのは分かっているけれど、プラスチックなしでは私たちの社会は立ち行かない。本設計では神奈川県相模川河口付近の海域、いわゆる“湘南の海”を敷地として、マイクロプラスチックを受け止める“フィルター”となる海藻の畑、海面を漂う比重の小さなプラスチックを受け止める“フェンス”となる防ゴミ堤が広がる新しいインフラの在り方、海の風景を提案する。ゴミがあることで、海と人の関係はどう変わるだろうか。



継承する軌跡

- 自動車組立工場跡地における大学統合計画 -

東京工業大学 佐山響

近年、郊外では少子化による生徒の減少により、経営難に陥っている大学が多く、統廃合に踏み切る大学の数は急増している。一方で特定の産業で急激に栄えた郊外都市ではその工場が閉鎖、移転することにより、工場で働いていた人だけでなく部品を作っていた近隣の下請け町工場や飲食店など町全体の経済が大きな影響を受けている。郊外都市のひとつ埼玉県狭山市ではこの二つの問題を重層的に抱えており、産業の町狭山市の地域経済を将来につなげる解決策として、工場跡地に近隣の三つの大学を統合することを提案する。



① 桶箱工法 ver.2

② Environmental Structures

東京藝術大学 金子太一

桶や樽に着想を得た手法を工法として、ポストテンションを用いた自由曲線形状の構造物、「桶箱工法」を提案。これをきっかけに環境を取り入れた構造物として「Environmental Structures」を制作。構造が成り立つその場所のエネルギーを取得し、構造力学として編成する。建築において、周辺環境や自然環境が付加価値として扱われるのではなく、それを根拠とした構造体のありかを問う。以上のテーマから取り組んだ今回の作品では、水、風、熱。3つの自然エネルギーに着目し、構造物がそれらによって成り立つ様を作品化した。



Lunar Twist Tower

東京大学 岩佐元春

小さく折り畳んだ状態でロケットに搭載し、着陸した後に空気を入れて膨らませて展開させ、人が月に短期滞在できるようなタワー型の構造物を考えました。円筒ねじり折りという折り方を基にし、部分的に曲線折りを用いてその曲線の曲率を操作することで、構造物の展開過程において複数箇所で見生じる飛び移り座屈(スナップスルー)の起きる順序を制御しました。月は重力が地球の1/6であったり、大気がなく風が吹かないなど環境が地球とは大きく異なり、設計にもそのような月の様々な環境条件を反映させました。